

# さざんか

第56号、2006年3月

寒い日が続いていますが、みなさまお変わりありませんでしょうか。インフルエンザの襲来もどうやらその極期は過ぎたようですね。今年はA型が多かったようです。既知のインフルエンザでも十分大変なのに、新型でも流行るとまたおおごとですが、専門家にいわせると、ウイルスの性質からしていつかは流行るのは必至ということのようです。まあ、いつかは来る大地震のようなものでしょうか、避けることは不可能なようですので大切なのは備え、ということでしょう。備えあれば憂いなし。科学的知識では当然昔の人よりも現代の方がはるかに物知りなのかもしれませんが、「生活の知恵」的知識で言うといつまでたっても昔の人に及ばないような気がします。知恵を学ぶと称して小学生に株売買の仕組みなどを教えている場合ではないでしょう。

さて、日本医療機能評価機構を再受審したわが病院ですが、幸いに前回に引き続き認定病院として更新されることになりました。とりあえず、第三者的には一定の標準を満たした病院であるとお墨付きを得たことになります。しかし機能評価に認定されることは目標ではなく、出発点というか、優秀病院へのパスポートというか、これから如何に地域に密着して地域から信頼される病院を築き上げるために再スタートするということですので、気持ちも一新して職員一同頑張りたいと思っています。

でも一体、病院機能評価ってなんなの？という方のために、うしろに解説を載せていますのでどういふものか是非ご一読下されれば幸いです。ちなみに今年の1月23日時点で日本の全病院9077中、認定病院は1916病院です。最新かつ難関のバージョン5で同日付けで認定されたのは全国で32病院でした。

## 県立北薩病院の基本方針

- 1 患者さんの満足、ご家族の安心を提供します
- 2 急性期医療の実践と、より高い専門医療を追求します
- 3 地域の医療、福祉との連携を強め、これを支援します
- 4 仕事を通して喜びと生き甲斐を追求します

---

---

## 県立北薩病院の理念

---

---

### 慈愛・協調・前進

---

---

---

---

#### 人生の儀礼

---

---

宮園 辰夫

人生儀礼というのは、通過儀礼とも呼ばれ、その人が生まれてから死ぬまでの間、或る段階ごとに行われる儀礼です。これには誕生、成年、結婚、病気、厄年、算賀、葬儀などの、家庭生活上の儀礼と、これに対して社会生活上の入園式、入学式、入講式、入団式、成人式などがあります。しかも家庭生活上の個人的な儀礼といっても、人は社会的な存在ですから、その個人の通過儀礼といっても、多分に社会的な承認につながるものであることは言うまでもありません。したがって個人の儀礼でも、今ではその多くが社会儀礼となっています。

たとへば出産一つを取り上げてみても、母親には家庭の構成員が増えることであり、社会的には社会の構成員が増加することになります。こうみてくると、個人儀礼も社会儀礼であることがわかります。社会は個人儀礼に対して、承認を与へ、個人が社会の構成員として承認され、個人の通過儀礼が社会的儀礼ともなる訳です。ここに個人―家庭―社会という連繫が見られるのです。これが社会的共同体の連帯を形作ることになります。今では学校の生活段階すなわち入学式、入寮式、卒業式なども同様の意味を持った通過儀礼となっております。今日は少し意味のわからない、むずかしい儀礼について書きましたが、これからも御加護を頂けますように祈る大切な儀式であるということでもあります。

#### 追

人は皆苦勞もあるのだらう。心配もあるのだらう。泣きたい時もあるのだらう。死にたい時もあるのだらう。そしてそれを乗り越えた時、人生は終わる。 山本五十六

---

---

## 患者憲章

---

---

- 1 患者さんには、常に人間としての尊厳を尊重された医療を受ける権利があります。
  - 2 患者さんは、どなたも、どのような病気の場合でも、平等かつ公平に必要な医療を受けることができます。
  - 3 患者さんは、治療、看護の内容および病状経過について、理解できる言葉で説明を受けることができます。
  - 4 患者さんは、十分な説明と情報を受け、納得のうえ自分の意志で医療を選択することができます。
  - 5 患者さんの、医療上および個人的な秘密は守られます。
  - 6 患者さんには、研究途上にある治療を受ける場合、前もって治療内容について十分な説明が行なわれます。
  - 7 患者さんは、お互いの入院生活を守るために、定められた諸規則を守る責任があります。
- 
- 

---

---

## 闘病記パートⅡ 一首吊りへの道程

---

---

カラーパーソン

数年前、腹水まで溜まった虫垂炎だか憩室炎だか結局原因不明のままであった腹痛を何とか抗生物質の投与で乗り切った話をさざんかに掲載しました。その後は特に大きな出来事もなく、健康上は日々平穩に過ごしてきました。ところが、2年前、持続する頭痛のために検査をしたところ、頚椎のヘルニアの存在が判明しました。頚椎のMRI フィルムを見たときのショックはいまだに脳裏に残っています。「おお、これは相当なもんだ！」と。

当初は後頭部痛と肩甲部痛があり、とりあえず頚椎カラーとビタミン剤、消炎鎮痛薬の内服で治療を開始しました。幸いに疼痛は徐々に改善してきましたが、ある日両上肢の近位部（体に近い部分）がピクツキ始めました。ははあ、これは筋繊維束攣縮だなとさすがに自らの専門分野だけにすぐ理解しました。脊髄の前角細胞（運動神経のおおもと、二次ニューロンの始まり）が傷害されるときに出現する症状です。細かく筋肉が痙攣する症状

です。うーん、ちょっとまずいかなあとは思いましたが、最終的解決には手術をするしかないので、当面は知らん顔して過ごしていくしかないかと居直って相変わらずのカラー装着と内服を続けました。

当初、頰椎カラーを装着し始めたとき、周りの人から、その格好は一体どうしたのかと質問され、それに答えてその理由を説明するのも段々面倒になってきたので、カラーは人が居ないところでのみ装着することにしました（車の運転中とか自宅。病院では誰も人がいないところなど）。とりあえず、これで3年くらいは持つのじゃないか、もしかしたらその間に自然治癒するかもと無理にでも楽観的観測をして過ごしてきましたが、ついに、恐れていたことが最近出現し始めたのです。

まず痛みが強くなってきました。午前中の仕事を終えるあたりから痛みが強くなってきます。忙しくて、昼休みの休憩が取れないときは一日中、寝るまで痛みで悩まされます。さすがに、夜寝る前になると、眠れないほどの痛みではなくなるため何とか時々睡眠薬を使用するくらいで切り抜けることは出来ています。アルコールは随分痛みを忘れることに貢献してくれています。まさに酒は人生の友なり。ただ、宴会などでは、アルコールで痛みを誤魔化してやけくそのようにカラオケなどで騒いだりするせいでしょうか、翌日は痛みが強くなってしまいます。自業自得。

それにしても重力がこれほどまでに体を痛めつけるとは。四ツ足から二足歩行になったヒトの宿命といったところでしょうね。柄にもなく昔柔道をしていたせいだろうか、へなちょこ柔道家に過ぎなかったのになあなどと、ふと頰椎ヘルニアの原因について考えたりもします。

痛みは何とか我慢したり、横になって重力のシャワーから逃れたり、薬をあれこれ変更したり、まずいとは思いつつ多めに服用したりしてなんとか乗り切れるのですが、最近出現した筋力低下にはさすがにびびりました。左上肢の近位筋（上腕2頭筋や3頭筋など）の脱力があり、顔や髪を洗ったり、モノを持つときに力が入らないのです。今のところ、まだ日常生活を大きく支障することはないものの、このまま症状が進行するといよいよ手術をしなければ駄目だろうなあ、覚悟しつつあるところです。手術して良くなるかどうかはまた別の話になるのでしょうか。

3年くらいは持つだろうと思ったのに、意外と早かったなあ。でも、よく考えたら左手だけだったから、字を書いたり箸を持ったりするのに不自由がないし、もう少しは持つかもしれないぞ。右手でなくて良かったなあ。ただ、今のままだったら進行することは間違いないので、新たに何かしなければならぬだろう。そうだ、頰椎牽引をして見よう！と思いついて、遅きに失した感はあるもののつい最近から首吊り（頰椎牽引）をするようにし

ました。

日常業務の中で、とても頸椎牽引をする時間なんてとれないと思って、これまでしてこなかったのですが、そんなことを言っている場合ではないのでとりあえず、「昼飯前の首吊り」と称して、昼間の15分間、地球の重力に逆らって首を引っ張っています。相手が地球ですから敗北は目に見えてはいるのですが。まあ、大きな期待は持てないものの、世にある奇跡みたいなことも起こるかもしれないし（甘い！。奇跡はそう簡単には起こりませんよ！）しばらくはこれで様子を見たいと細くなってしまった左手の二の腕をさすりながら思っているところです。はてさて首吊り男の将来や如何！

前回の闘病記は一時的な炎症でしたので、何とか乗り切れればそれで終わり、でしたが、どうやら今回はそうはいきそうにありません。行き着くところまで行かないと、闘病記パートⅡは終わりそうにありません。おそらく、パートⅢは手術後、病院のベッドで書いていることになるのではないのでしょうか。その時期がいつなのかは神のみぞ知るといったところでしょう。とは言っても神様って知ってても簡単には教えてくれないのでただひたすら待つしかありません。ときに癒し、しばしば支え、常に慰む。最近のお気に入りの言葉です。

---

---

## 俳句

---

---

西屋敷喜美子

2月

伊佐盆地 冬将軍の 続く日々

口と手と 足も動きし 春隣

3月

遠距離の 電話の淋し 春の雨

一言を 胸に収めて 藪椿

——日本医療機能評価について（同機構のホームページより）——

**設立の趣旨**

国民が適切で質の高い医療を安心して享受できることは、医療を受ける立場からは無論のこと、医療を提供する立場からも等しく望まれているところです。

国民の医療に対する信頼を揺るぎないものとし、その質の一層の向上を図るために、病院を始めとする医療機関の機能を学術的観点から中立的な立場で評価し、その結果明らかとなった問題点の改善を支援する第三者機関として、財団法人日本医療機能評価機構は設立されました。

### 第三者による評価の必要性

病院を始めとする医療機関が提供する医療サービスは、医師、看護師等様々な専門職種の職員の技術的・組織的連携によって担われていますが、医療の受け手である患者のニーズを踏まえつつ、質の高い医療を効率的に提供していくためには、組織体としての医療機関の機能の一層の充実・向上が図られる必要があります。

もとより、質の高い医療を効率的に提供するためには、医療機関の自らの努力が最も重要であり、そのため医療機関が自らの機能を評価するいわゆる自己評価が実施されているところですが、こうした努力をさらに効果的なものとするためには、第三者による評価を導入する必要があります。

第三者評価の実施により、次のような効果を期待することができます。

1.  
医療機関が自らの位置づけを客観的に把握でき、改善すべき目標もより具体的・現実的なものとなります。
2.  
医療機能について、幅広い視点から、また蓄積された情報を踏まえて、具体的な改善方策の相談・助言を受けることができます。
3.  
地域住民、患者、就職を希望する人材、連携しようとする他の医療機関への提供情報の内容が保証されます。

4.

職員の自覚と意欲の一層の向上が図られるとともに、経営の効率化が推進されます。

5.

患者が安心して受診できる医療機関を増やすことになり、地域における医療の信頼性を高めることができます。

日本医療機能評価機構では、医療機関の機能の第三者評価を行う事業を主として、医療機能の評価に関する調査・研究開発、医療関係者の研修等を行い、わが国における医療機関の機能の一層の充実・向上のための支援を行います。また、医療安全に関する各種事業も行います。

## 日本医療機能評価機構の性格

日本医療機能評価機構が行う事業は、高度に専門的で多面的な要素を持つ医療を適切に評価・分析・情報提供するという性格上、関連するそれぞれの専門領域における学術的な判断が基礎となるべきであります。また、医療機関の機能の改善・向上を図り、地域住民の信頼を高めるため、国民的な基盤に立って、特定の立場に偏することのない中立的な立場で活動が行われる必要があります。日本医療機能評価機構は、このような観点から、学術的・中立的な組織と運営を確保しています。

## 基本財産・運営費

日本医療機能評価機構の運営を維持するため、保健・医療・福祉に関する団体・企業、被保険者を代表する団体、一般企業、個人等から広く出資を募り、基本財産を設けています。運営費は、基金の果実、評価を受ける施設が負担する審査評価料、医療機能評価等に関する委託研究の受け入れ、その他の収入によって賄われています。

基本財産は、次の団体等から出資されています。

- ・ 厚生労働省
- ・ 日本医師会
- ・ 日本病院会
  
- ・ 全国自治体病院協議会
- ・ 全日本病院協会
- ・ 日本医療法人協会
  
- ・ 日本精神科病院協会
- ・ 日本歯科医師会
- ・ 日本看護協会
  
- ・ 日本薬剤師会
- ・ 日本病院薬剤師会
- ・ 健康保険組合連合会
  
- ・ 国民健康保険中央会

==== さつま狂句

==== キンカン

か か へそまが いみ  
女房ん臍曲いこら巖しもんぢや

て な て やっけ  
火を焚たや何よ焚てたかち厄介な世



---

---

## 今月の言葉

---

---

ときに癒し

しばしば支え

常に慰む

トルドー

---

---

### 編集後記

---

---

早いものでもう 3 月。トリノ五輪も終わってしまいました。今年は野球、サッカーと世界的イベントがあるのでスポーツファンには楽しみです。他人のすることで喜んだり、悔しがったり怒ったり出来るスポーツ観戦。みんなが観客になり評論家になる。不公平、不公正感が際立ってきた世の中と異なり、公平なルールに則ったスポーツの世界の勝ち負けはあれこれいいながらも楽しむのが通なのでしょう。

県立北薩病院さざんか編集局 発行責任者 高橋浩一